川村学園女子大学研究紀要　第15巻　第2号　97頁—111頁　2004年

日本におけるニーチェ受容史瞥見（1）
——西谷啓治のニヒリズム論をめぐって——

湯浅　弘*

An Essay (1) on Japanese Interpretations of Nietzsche
——On Keiji NISITANI's Nihilism——

Hiroshi YUASA

要　旨

本論文は，日本におけるニーチェ受容史研究の一環として西谷啓治のニヒリズム論に検討を加えようとするものである。西谷のニヒリズム論は，第二次世界大戦直後，日本でニヒリズムや実存思想が流行した時期における日本人のニーチェ解釈を代表する論考であり，その論考で西谷は，ニヒリズムに関するニーチェの言説を再構成して，ニヒリズムの諸相をニヒリズムの自己克服と見るある種の歴史哲学的視点を打ち出した。西谷の議論の特色は，ニヒリズム問題にアプローチする方法論を明確化した点に，またヨーロッパの思想史の中でニヒリズムという問題の位置を適切に洞察した点に，さらにはニヒリズム問題における科学的精神の意義を明確化した点などに求められるが，本論文では，以上のような論点について以下の項目に従って論じてゆくことにする。(1) 日本人のニーチェ受容史における西谷のニヒリズム論の位置。(2) 西谷のニヒリズム論の基本的視座。(3) ニーチェにおけるニヒリズムの諸相。(4) ニヒリズム問題における科学的精神の意義。

キーワード：ニーチェ，ニヒリズム，近代，歴史哲学，科学的精神

*助教授　人間学・哲学

湯浅　弘

1　問題の所在

日本におけるニーチェの受容には，既に百有余年の歴史がある。その歴史については幾つかの重要な研究がこれまでにもなされており，日本人のニーチェ受容史の諸相は次第に明らかにされつつある。[1)]

だが，そうした研究は散発的なものにとどまるものであり，これまでの研究の蓄積によってニーチェ受容史の詳細が過不足なく語り尽くされてきたというわけではない。また，そうした基礎的研究が途上にあるため当然のことではあるが，ニーチェ思想の受容のあり方から日本の近現代の思想や文化のあり方を考察するといったより立ち入った試みも，少なくとも纏まった形ではこれまでのところなされてはこなかった。一方でニーチェの受容の膨大な蓄積がありながら，他方その蓄積の対自化はまだ十分にはなされていない。日本人のニーチェ受容史に関する研究の現状はこういった状態だと考えられる。

本稿は，以上のような認識を前提として，西谷啓治のニーチェ解釈に検討を加えようとするものである。『ニヒリズム』（西谷啓治，弘文堂，1949年）の著者である西谷は，第二次世界大戦後の実存思想やニヒリズムの流行期における日本のニーチェ解釈の代表的存在の一人である。その意味において日本におけるニーチェ受容史の一時代を画する存在であり，哲学や思想という分野からのニーチェ解釈という文脈においては，大正期初頭の和辻哲郎，昭和10年前後における三木清と並んでその歴史には欠き得ない存在である。その限り，本稿は，戦後期のニーチェ理解という日本におけるニーチェ受容史の重要な一断面を明らかにするという意味を持っている。[2)]

だが他方，西谷はニーチェ研究者という枠内で捉えきれる存在ではなく，西洋思想史の該博な知識と仏教思想とを糧として独自の宗教哲学を展開した碩学である。西谷を取り巻く外回りの消息も付け加えて言えば，西谷は，三木清の他，戸坂潤，久松真一，下村寅太郎といった人々ともに西田幾多郎の直弟子にあたる京都学派の第二世代に属す哲学者であり，[3)] さらに言えば，戦後では悪評のみ高かった第二次世界大戦中の二つの座談会，すなわち『文学界』主催の「近代の超克」をテーマとする座談会（昭和17年）と，「世界史の哲学」をキーワードとする京都学派の歴史哲学を主軸とした『中央公論』掲載の座談会（『中央公論』掲載は，昭和17年，18年）の参加者でもある。

京都学派の歴史哲学にせよ戦中の「近代の超克」関連の議論にせよ，それらは本稿が主題化しようとするものではない。また同じく，全体としての西谷の哲学も本稿で主題化しようとするものではない。しかし，『ニヒリズム』も含めて本稿で取り上げようとする西谷のニーチェ

関連の論考は昭和10年代，20年代に発表されたものであり，またそうした論考で提示されているニヒリズムに関する思索は西谷の哲学的営為の根幹に関わるものである。[4] そうした事情を考慮すれば，間接的にではあるが，本稿は以上のような諸問題の解明に関しても若干の寄与をなし得ると言えるかもしれない。

ところで，既に言及した『ニヒリズム』の他に西谷がニーチェを主題的に取り上げている論考としては，「ニイチェのツァラツストラとマイスター・エックハルト」（初出は，石原謙編『哲學及び宗教と其歴史』所収，岩波書店，1938年）と「ニイチェに於けるニヒリズム＝実存」（初出は，氷上英廣編『ニイチェ研究』所収，社會思想出版部，1952年）がある。このうち前者は，中世の神秘主義者マイスター・エックハルトとニーチェの思想とを比較したうえで両者の質的な類似性を論証しようとした論考で，後に『根源的主體性の哲學』（西谷啓治，弘文堂，1940年）に収録された。またニーチェのニヒリズム論を主題とする後者は，書かれた時期が近いばかりでなく内容的にも『ニヒリズム』での議論に重なり合う論考で，後に『新版ニヒリズム』（西谷啓治，創文社，1966年）に付録として収録された。

こうした経緯からも窺えるように，後者の論考は『ニヒリズム』におけるニーチェ解釈と同列に扱って差し支えないと思われる。これに対して前者の論考については，ニーチェとエックハルトとを比較するという議論の構図から見ても，その論考と『ニヒリズム』での議論とのあいだに内容上の相違があることは明らかである。ただし，「ニイチェのツァラツストラとマイスター・エックハルト」で主題となっているのも，ニーチェとエックハルトに共通する根本的態度としての「生の辯證法的運動の徹底」（第一巻，p. 25）であり，「人間否定を通しての人間肯定の徹底」であって（第一巻，p. 25），エックハルトについては措くとしても，少なくともニーチェについて言えば，その主題はニヒリズムの克服に関わる事柄である。その限り，ニヒリズムという用語自体は用いられていないものの，その論考でも暗黙のうちにニヒリズムが主題化されていると見ることも可能である。そうした意味ではその論考と『新版ニヒリズム』の議論との間には強い連関が認められるのである。

このような事情のため，西谷のニヒリズム論を主題とする本稿では，主として『新版ニヒリズム』を中心とし，「ニイチェのツァラツストラとマイスター・エックハルト」については必要に応じて適宜言及するという形で議論を進めてゆきたい。

2　西谷のニヒリズム論の基本的視座

西谷のニーチェ解釈は，ニヒリズムという概念を機軸として後期のニーチェ哲学を再構成す

るというもので，様々な面を持つニーチェの言説の中からニヒリズムという問題にとりわけ焦点を当てたという点にその大きな特色がある。ニヒリズムを問題として見るという視点を明確に打ちだした点において，また，後述するように信と知，言い換えれば宗教と科学的・実証的精神の対立という西洋思想史の壮大な構図の中でニーチェのニヒリズムを主題化した点において，西谷の試みは，力への意志説とニヒリズム論を中心にして後期ニーチェの哲学をプラトン以来の形而上学の歴史の中に位置付けようとしたハイデガーの試みと比肩し得る意味を持っている。[5)]

では，ニヒリズムを論じる西谷の基本的な視座はどのようなものだろうか？

西谷は，ニヒリズムに関わる概念整理をしながら自らの視座を明確化しているが，西谷によればニヒリズム，あるいはニヒリズムを捉える視座とは，まずは次のようなものである。

> ニヒリズムは第一に，時と處とを越えた，人間存在の本質に根差した問題であった。自己の存在が無根據なものとして自己自身に露呈されてくる，さういふ實存的な問題であった。ところが第二に，ニヒリズムは歴史的・社會的な現象でもある。すなわち史學の對象ともなるものである。それは我々の歴史的な生が，客觀精神としての根據を喪失し，その生を支へる價値體系が崩落し，歴史的・社會的生の全體が據り所を失つたといふことを示す現象である。外的には社會秩序の崩壊，内的には精神的頽廢の徴候であり，従つてまた，大きな轉換期の現れであるともいへるものである。さういふものとしてみる場合，それは一應，歴史上に時々起つたやうな，一般的な現象といへるかもしれない。例へば戦後の日本の氣分といふ如きものも，さういふ一般的な現象の一つとも考へられる。そして第三に，今いつた二つの見地が綜合されるとき，即ち，さういふ一般的な歴史現象としてのニヒリズムが，更にその哲學的根據にまで追究されるとき，それは歴史哲學の對象ともなるであらう。（第八巻，p. 7）

ニヒリズムは一面では自己の存在の根拠の喪失という個別的な，そしてその意味では人間存在にまつわる普遍的な現象である。が，場合によればそれは「歴史的・社會的生の全體が據り所を失つた」という歴史的・社会的な現象でもあって，その場合には歴史学の認識の対象となり得るような現象でもあるというのである。西谷はここで，このような二つの次元でニヒリズムを問題化する視点が成り立つことを否定してはいない。が，ニヒリズムを単に自己の存在に関わる問題として見るのも，また逆に言わば自己とは関わりのない歴史認識の対象として見るのも，どちらの視点も単独では不十分だと見ているのである。両者を綜合する視点に立つこと

を西谷は要求しており，その視点を西谷は「歴史哲學」と命名しているのだ。

では，「歴史哲學」的にニヒリズムを主題化するとは，より立ち入って見た場合どういうことであろうか？また，西谷の最終的な立場は，「歴史哲學」にあると見てよいのだろうか？

後者の問いに関する結論から先に言えば，「歴史哲學」はニヒリズム問題に対する西谷の最終的な立場ではない。だが，西谷の最終的な立場を明確にするためにも，その前段階に当たる「歴史哲學」的なニヒリズムの把捉をまず捉えておかねばならない。

> 歴史哲學の問題となる場合，ニヒリズムの把捉は，いふまでもなく歴史的な現象の根柢的な理解または認識といふ意味をもつてゐる。それは歴史哲學的な把捉である。が然もその認識は，歴史のうちにおける人間存在そのものの本質に關係し，歴史哲學的な認識といふ面を持つてゐる。そしてこの兩面が歴史哲學者の自己に於て一つであること，歴史に現象した「人間」の本質にかかはる問題を，あくまで自己の問題として追體驗し，それによって歴史と人間とを哲學的に捉へるということ，それが歴史哲學的な把捉といふことの意味である。（第八巻，p.9）

ニヒリズムという「歴史的な現象」を「人間存在そのものの本質」に関わる現象として「自己の問題として追體驗」しつつ「根柢的」に把握すること。ここで言われているニヒリズムの「歴史哲學的な把捉」は，ニヒリズムを捉える第一，第二の視点を総合するという西谷の要求を過不足なく満たしている立場のように見える。西谷は，このような立場が「哲學的人間學といふ如きものを媒介とした歴史哲學」（第八巻，p. 8）に代表されると見て，その一例としてヤスパースの『世界観の心理学』を挙げているが（第八巻，p. 9参照），西谷はこのような立場にも一定の共感を持っていると思われる。

だが，既に触れたように西谷は最終的にはこうした立場を乗り越えていこうとするのだが，それは，この「歴史哲學」的立場が，究極のところなお不十分な問い方でしかないからである。言い換えれば，この立場からはニヒリズムについての十全な問い方は望めないからである。では，どのような点においてこの立場は不十分なのだろうか？

西谷は，「どんなに歴史のなかで生を問題にするといっても，或る意味で眞に歴史的に問うてゐないといふこともあり得る。それは問ひ方が歴史を遊離してゐるときであり，問ひそのものが歴史的に問はれてゐないときである」（第八巻，p. 10）と言う。また，このような場合には「歴史を問ふことによって却って歴史から遊離する」（第八巻，p. 10）とも言う。これらは，言うまでもなく「歴史哲學」的立場を念頭に置いて語られている事柄であるが，要するに

その立場には歴史の傍観者であるかのような意識が纏わり付いているというのである。そのような意味で「従来の歴史哲學では，なおやはり觀るものと觀られるものとが二つになってゐる。すなはち觀想的立場を脱してゐないのである」（第八巻，p. 9）と言われているのだ。

既に触れたように，ここで西谷が「歴史哲學」的立場として想定しているものは，「哲學的人間學という如きものを媒介とした歴史哲學」である。それゆえ，西谷のこのような指摘は，哲学的人間学において人間存在の歴史性に対する意識が相対的に希薄だという点を突いた指摘だと言えよう。必ずしもニヒリズム問題に限らず一般論としてみても，こうした点は哲学的人間学の弱点だと西谷は考えていただろうと思われる。が，問題がニヒリズムということであれば，この弱点は致命的なものと言っていいほどの深刻な弱点と思われていたはずである。西谷の見るところ，ニヒリズムはそうした傍観者的な対応では捉えきれないばかりでなく，そのような立場からはニヒリズムの超克といった切迫した論点が十全に語り出されることもあり得ないからである。かくして，西谷は「歴史哲學」的立場を越えるニヒリズムへのもう一つ別のアプローチを提示する。それは，西谷が「歴史の實存主義的な把捉の立場」（第八巻，p. 10）と呼ぶものに他ならない。

> かくして第四に，従来の歴史哲學とは異つた，歴史への根源的な問ひ方がなければならぬ。歴史への問ひが，その問ひ方そのものに於て歴史的に問はれるといふこと，問ふ者自身が歴史の中で，二つではなくしてどこまでも一つであり，しかも所謂パトス的に，また實存的に問はれるといふこと，歴史と人間とにおける本質と現象との關係が，あくまで歴史的な實存のうちで，實存的に自覺されてくるといふことがなければならぬ。これは言ひ換へれば，大きな歴史的問題が同時に自己自身の問題となるといふことである。ニイチェ的にいふならば，人類の歴史を自己自身の歴史とするといふこと，すなはちその歴史を實存の立場で摑むというふことである。それが，歴史への問ひ方自身が歴史的であるといふことに外ならぬ。それはつまり，大きな歴史の問題が自己自身の中において，實存の立場で，ニイチェのいふ情熱的な對決の場を見出すといふことに外ならない。（第八巻，p. 10）

ここで呼び求められているのは，ニヒリズムという「大きな歴史的問題が同時に自己自身の問題となる」という形で，あるいは「人類の歴史を自己自身の歴史とする」というような実存的な構えにおいて，ニヒリズムという問題と対決するといった態度である。引用文中のニーチェへの言及からも窺えるように，ニヒリズムに対するこのような「歴史の實存主義的な把捉の立場」は西谷の立場であると同時にニーチェの立場でもある。ニーチェは，例えばあの有名な

一節において現今のニヒリズムの到来を語るのに，「ヨーロッパの最初の完全なるニヒリスト，しかもニヒリズムを自己の中で終わりまで生き抜いた者，ニヒリズムを，自己の後ろに，自己の下に，自己の外に持つ者として」語った。[6] この表現を含む一連の文章に関連させて西谷は，「（ニヒリズムの到来という）その歴史の流れの外に立ち，傍に退いて自らを省察するといふこと，それは單に歴史から遊離することではない。むしろ歴史に代つて歴史の歸するところを省察することである。しかもそれは歴史家のごとく，また歴史哲學者のごとく，歴史の現實と理念とをただ客觀として觀想するといふことではない。むしろ自己において歴史を實驗することである。自己を實驗臺として，歴史の未来を，歴史の歸趨を，實驗することである」（第八巻，p. 47，括弧内補足湯浅）と言っている。この注釈は確かにニーチェの文章に対する注釈ではある。だが，既に触れたように，この注釈に語られているような「歴史の實存主義的な把捉の立場」は，ニヒリズム問題に対する西谷自身の基本的な立脚点を物語るものであると筆者には思われる。しかも，それは『ニヒリズム』という著作だけに限ってのことではない。注4で記したような西谷の回顧からも明らかなように，その立場は結果的にはその後の西谷の哲学的営為の基本的な立脚点となる基本的な視座であるように思われるのである。

3　ニーチェにおけるニヒリズムの諸相

前節ではニヒリズムを捉える西谷の基本的な立場について瞥見し，それがニヒリズムに関する「歴史の實存主義的な把捉の立場」であることを確認した。その立場は，端的に言えば，ヨーロッパの歴史に現れてきたニヒリズムのなかで身を以てニヒリズムを生きるというばかりでなく，歴史の動向を自己のうちへと誘い出しそれを実験的に先取りさえする立場として構想されている。西谷はニーチェを「自己が歴史のうちに生きるといふだけでなく，歴史が自己のうちに生きるといふ」（第八巻，p. 48）仕方で「歴史のうちで歴史を實驗的ー哲學的に生きる者」（第八巻，p. 47－p. 48）として捉えているが，前節でも触れたように，こうした規定は西谷自身の自己規定と見ることもできるものなのである。

以上のような議論から西谷のニヒリズム論の特色の一端は明らかになったと思う。だが，以上の議論では，ニヒリズムがなぜ大きな問題として生じてきつつあるのか，その到来の歴史的必然性という問題に関してはあまり触れてこなかった。が，あらためて言うまでもなく，この論点は，ニーチェのニヒリズム論の歴史的射程に関わる重要な論点である。ニーチェのニヒリズム論が現在に至るまでニヒリズム論の古典という不動の位置を占めるのも，ニーチェがこの点に関してすぐれた洞察を示していたからに他ならないと思われるが，本節ではこうした論点

に関する西谷の所論を取りあげよう。

ひとまず西谷の議論を離れてニーチェ自身の言説に焦点を絞れば，この点に関するニーチェの洞察は凡そ次のようなものである。すなわち，これまでヨーロッパの歴史を導いてきた至上の諸価値――そのシンボリックな表現が神に他ならない――は，もはや人々からの信を得られない状況に成りつつある。いわゆる神の死であり，「至上の諸価値からその価値が剥奪されるということ」[7] という意味での現今のニヒリズムである。ところで，それをもたらしたものは近代においてとりわけ台頭してきた啓蒙的理性の立場であるが，そうした実証的・科学的精神も，その由来を辿ればキリスト教が育成してきた知的誠実性にその源泉は求められる。他方，キリスト教とプラトニズムという伝統的な至上の諸価値の担い手もまた，無への意志として潜在的なニヒリズムに他ならない。とすれば，神の死を機縁とする現今のニヒリズムの登場は，ヨーロッパの至上の諸価値にもともと潜在していたニヒリズムが顕在化した事態に他ならない。しかも，その顕在化をもたらしたものが知的誠実性というキリスト教道徳に由来する徳である以上，それは潜在的なニヒリズムがそれ自身の徳によって，いわば必然的に顕在化したということである。現今のニヒリズムが克服されるべきものだとしても，この意味においてそれに至るヨーロッパの歴史もニヒリズムの自己克服の歴史として捉えられる。凡そこのような洞察がニーチェのニヒリズム論の基本的な洞察だと言ってよい。[8]

ニーチェの言説からこうした論理をいち早く取り出したのはハイデガーであり，また，ハイデガーにおけるニーチェとの対決にやや遅れて『ニヒリズム』を書いた西谷なのである。だが，ハイデガーの場合，以上のような一連の過程は専らプラトン以来の形而上学の歴史として描き出されており，ニーチェのニヒリズム論は換骨奪胎され，いわばハイデガー流に読み替えられている。その意味ではハイデガーのニヒリズム論はニーチェ研究というより，むしろそれとは独立したハイデガー独自の思考の所産という面を強く持っている。

これと対比した場合，西谷の議論が少なくともニーチェのニヒリズム論により忠実であることは明らかである。[9] 西谷は先に要約したニヒリズムの二つの相に加えその前後も含めてニーチェのニヒリズム論を再構成しているが，その基本的な構図は，ニーチェ解釈としては現在においても通用すると思われる。やや長くなるが，代表的な箇所を引用してみよう。

> ニイチェによれば，ニヒリズムはもともと肉體の住む此の地上の世界に於ける苦惱，不如意，此の世界に對する絶望と意欲喪失から，自然的に發生するものである。宗教や形而上學は此の世界の彼方に「他の世界」を立てることによって，その自然發生的なニヒリズムを克服する。併し，其等が含む，此の世界に對する絶對否定の要求は，實は地上の人間に於ける

「無への意志」であり，彼岸の世界はその無への意志から生れた觀念である。宗教による克服とは，意欲喪失を無への意志に轉じたことに外ならない。その限り宗教や形而上學もその根本にニヒリズムを，但し意志的な（併し意志されたのではない）ニヒリズムを潛めている。それは地上の人間の，「肉體」の病ひであり，生の疲れである。そのことは，神や彼岸の世界が信ずるに値しなくなつた時に，露呈されて来たのである。そしてそこから本来の意味でのニヒリズムが初まる。――かかる轉換をなさしめるものは正直（Redlichkeit）であった。――それはニヒリズムとして意志されたニヒリズム，弱さではなくして強さとしてのニヒリズムであり，自己自身の上にはつきりと座し得たニヒリストのニヒリズムである。ここにおいて初めてニヒリズムは實存となる。そこではニヒリズムは成人への成長を意味し，成人の自由を意味する。といふのは，我々のうちなる尊敬する心胸を破つて出ること，神を初めとして，我々を育て上げてくれたすべてのものの權威の絏から解放されること，そして新しい價値創造への地平が開かれること，さういふ自由をニヒリズムは與へるからである。それ故に，かかる深淵的な批判と否定は，その裏から創造と肯定を喚び起こしてくる。ニヒリズムの裏はニヒリズムの超克である。（第八巻，p. 230－p. 231）

ここで明確に提示されているのは，自然発生的なニヒリズム（「ニヒリズムの卽自態」第八巻，p. 198）から宗教や形而上学（自然発生的なニヒリズムの克服であると同時に，他面では「無への意志」としてニヒリズムの「無自覺的な對自化」第八巻，p. 198）へ，また，宗教や形而上学から現今の「本来の意味でのニヒリズム」（「自覺的になったニヒリズム」第八巻，p. 200）へ，そしてさらには現今のニヒリズムからその超克へというニヒリズムの一連の諸段階である。自然発生的なニヒリズムから出発するニヒリズムがこれら諸相を経つつ最終的にその超克へと至ると考えられており，その意味でこの過程はそのどの局面を捉えてもニヒリズムの自己克服という様相を帯びている。西谷は，こうした過程は「一面からいへばニヒリズムの，卽ち生の否定の，徹底化の過程であり，同時に反面からいへばその否定を通して意志が，卽ち生の肯定としての「力への意志」が，次第にその意志自身としての姿を顯はしてくる過程である。この兩面は恆に綯ひ合わされている」（第八巻，p. 231）と言う。また，この過程が「一貫した一つの辨證法的な發展」（第八巻，p. 231）として考えられるものだとも言っている。

「一貫した」と言われているところには，これら一連の過程は，それ自身に内在するある種の必然性によって押し進められると考えられていることが窺われるが，この過程を捉えるのに「證法的な發展」という言葉が妥当かどうかという疑義を提出することはできるだろう。また，

ニーチェの遺稿に関するその後の文献学的研究の視点から見れば，ここでの西谷のようにニーチェを「強さとしてのニヒリズム」の体現者であると同定するためにはニーチェにおける「ニヒリズム」という用語法に関する慎重な配慮が必要だろう。西谷の以上のような記述に対しては，現在の時点から見ればこうした批判的観点が提出され得る。

だが，ニーチェのニヒリズム論に関する一つの整理として，言い換えればニーチェの理解したヨーロッパの歴史の一つのモデルとしてこのような記述を捉えるならば，既に触れたようにこの記述は現在でも有効であると思われる。ニーチェの言説からこうしたニヒリズムの自己克服の諸相を明示的に取りだした点に，西谷のニヒリズム論の際立った特徴があると思われる。

4　ニヒリズム問題における科学的精神の意義

前節で紹介したような西谷の記述が今なお説得力を持つとすれば，それは，ニヒリズムの自己克服の歴史を織りなす二つの主役，つまり宗教と科学，より適切に言えば宗教的生と科学的精神に関して西谷がすぐれた洞察力を示しているからだと思われる。

宗教に関して言えば，「此の地上の世界に於ける苦悩，不如意，此の世界に對する絶望と意欲喪失」から即自態としてのニヒリズムが発生すると見て，キリスト教を始めとする宗教の意義をその自然発生的なニヒリズムの克服と捉えている点に西谷の着眼の鋭さはまず認められる。これは，むろん宗教の機能の一面をニヒリズムへの対抗手段という点に認めていたニーチェの言説に含まれていた洞察ではある。だが，通常主題化されることの稀なこの点を捉えて，ニヒリズムの自己克服の歴史の起点に自然発生的なニヒリズムを置いた点に西谷のすぐれた洞察を見ることができる。また，第二には，以上のような意味ではニヒリズムの克服の一局面をなす宗教が，他方では「無への意志」として，また「生に敵對する生」（第八巻，p. 231）としてそれ自体一段深化したニヒリズムに他ならないという点を強調したところにも，西谷の議論のすぐれた点が認められる。この洞察自体もニーチェのうちにあって，ある意味ではニーチェのキリスト教批判の核心にある洞察だと言ってよい。だが，おそらくはキリスト教的伝統から自由であった点が幸いしたためか，西谷がこの点を敢えて強調し，それをニヒリズムの自己克服の歴史に明確に位置付けた点は西谷の功績の一つと見なすことができるかと思われる。

ところで，宗教的生を生きている人間から見れば，宗教が自然的ニヒリズムの克服であるということすら気付かれない場合も多いかも知れない。ましてや，キリスト教を始めとする宗教が「無への意志」であり，「生に敵對する生」としてニヒリズムであるということは，宗教的生を生きている人間には自覚され得ない。つまり，宗教的パースペクティヴからそのことを洞

察することは，原理的に言って不可能なのである。

西洋の近代思想史が教えるように，そのことを洞察し得る可能性を持つのは科学的精神という別のパースペクティヴから自己と世界を，そして宗教現象を理解し得る人間である。ここでの文脈では，科学的精神を実証的精神，合理的精神，啓蒙的精神などと言い換えても差し支えない。いずれにせよ，ニーチェのうちでそうしたパースペクティヴが機能することによって，ニーチェの宗教批判が可能になったのである。これは疑い得ないところであるが，西谷はこの点をきわめて重視し，例えば次のように言っている。

> 近代に於ける本來の不安としての，あらゆる出来事の無意味さといふこと，或は普遍的な「無」の状態といふことは，會て言つたやうに近世における科學の勃興といふことと結びついてゐる。ニイチェのニヒリズムでも，彼が科學的な精神や見地を思切り率直に且つ大膽に徹底させようとしたことが，本質的な契機の一つとなつてゐる。然もそこには一種の徹底した科學主義が含まれてゐたのである。（第八巻，p. 210）

ここで最も問題となるのは，西谷がニーチェのうちに見る「一種の徹底した科學主義」の内実であろう。西谷の言うニーチェの「徹底した科學主義」とは，どのようなものだろうか？また，西谷は，ニーチェのニヒリズム論を論じるにあたって，なぜその点をとりわけ重視しているのだろうか？

西谷はこうした問題に関して，大別して二つの論点を提示している。まず第一点は，ニーチェにおいて科学は，「科學する人間のあり方といふ所まで掘り下げて」（第八巻，p. 211）問題とされていたという点であり，「科學的に研究するといふことが，ニイチェにとっては初めから一つの實存であり，研究する當の人間の自己存在に係るものであった」（第八巻，p. 211）という点である。この点に関連して西谷は，ニーチェが「近代のあらゆる問題の底にある科學的な（特に機械觀的な）世界觀を，《中略》自己自身の問題として，自己の正直さに關係した問題，良心の問題として受入れ，それを自己の實存に化した」（第八巻，p. 212）という点を指摘している。「機械觀的な」とか「世界觀」という措辞は誤解を引き起こしかねないが，その他の点では妥当な指摘だと思われる。

また第二点は，第一点とも関連するが，科学的営為の根底にある「眞理への意志」というモラルにもニーチェが疑義を提出していたという点である。つまり，その点に「科學とか科學的精神とかいふものに對する，ニイチェの一層突込んだ，一層厳しい要求」（第八巻，p. 214），あるいはニーチェにおける「科學的といふことの假借なき徹底」（第八巻，p. 214）を見てと

ることができ，さらにはニーチェが「通常の科學や哲學的な科學主義に中途半端な停滞を認めざるを得なかつた所以」を理解することができると西谷は言うのである。このような意味での「徹底した科學主義」とニヒリズムの議論を関連付けて西谷は次のように言う。

普通に科學的精神といはれるものの立場，普通に實證主義や反形而上學や無神論といはれるものは，なほモラルに立脚し，「眞理への意志」に依つている。然るにニイチェにおける反形而上學や無神論は，さういふ立場をも突破して，却ってそれに對する裏からの批判を含むものであった。彼の無神論はいはば高次の無神論である。覆面した無自覺的なニヒリズムから顯はな自覺的になつたニヒリズムへ進んだものである。彼に於いては科學的精神や科學的良心の徹底といふことは，さういふニヒリズムに立つことと別ではなかったのである。（第八巻，p.214）

最後の一文で明確に言われているように，西谷は科学的精神の徹底はニヒリズムの徹底を意味すると考えている。そして，前節での議論から明らかなように，そうした形でニヒリズムを徹底し前へと進めることは，西谷にとっては同時に生の否定から生の肯定への，つまりニヒリズムからその超克への道程を先へと進み，その超克を用意することに他ならない。とすれば，「眞理への意志」にも疑問を付すニーチェの「徹底した科學主義」を西谷がとりわけ重く見る理由自体は明白で，この点に関してはこれ以上縷説する必要はないだろう。

ただ，ニーチェの「徹底した科學主義」あるいは「高次の無神論」に関連してなお一点付け加えねばならない点がある。それは，以上のようなニーチェのニヒリズム論の理解が西谷において可能であったのは，宗教的精神と科学的精神の対立を機軸とする西洋の近代思想史に関する適切な理解が西谷にあったからに他ならないという点である。

『ニヒリズム』において西谷は，ヘーゲル没後に「ヨーロッパには，實生活の上でも精神生活の上でも，深い危機の徴候が現はれて来た」（第八巻，p. 17）としてその時期を「イデアリスムスからレアリスムスへの轉換の時期」（第八巻，p. 17）と同定している。そのレアリスムスの代表者として，ショーペンハウエル，キェルケゴール，フォイエルバッハそしてシュティルナーを論じ，そららとの関連においてニーチェのニヒリズム論を位置付けている。そのような思想史的文脈では，先の「高次の無神論」というニーチェのニヒリズムに関する規定とも関連することだが，次のような非常にすぐれた洞察が示されているのである。

「神」の正體が「無」であるといふ，このやふなニイチェの無神論は，宗教の基盤を抉ら

うとするその動機に於て，フォイエルバッハの無神論と共通した性格をもつが，その抉り方の深刻さには，明らかに格段の差がある。フォイエルバッハが「神」の觀念の起源に，單に人間の幸福衝動を見たのに對して，ニイチェは生そのものの自己分裂，生否定の意志，「無」への意志，ニヒリズムを見る。これは宗教的な生經驗がもつと等しい深さに於ける宗教否定，形而上學的な存在把握がもつと等しい深さに於ける形而上學否定ともいふべきものである。それ故，フォイエルバッハがその宗教批判の後再び容易に生の社會的表面に浮び出て，人間性と人類愛を説いたのに對して，ニイチェが遺稿のうちで，フォイエルバッハには神學の臭ひがすると言ひ得たのである。（第八巻，p. 196－p. 197）

この引用に示されているような息の長い射程において，そしてまた洞察の深さにおいて，西谷はニーチェのニヒリズム論を捉えていた。だが，その射程の長さは，これにとどまるものではなく，18世紀の啓蒙思想は言うまでもなく（第八巻，p. 189参照），少なくとも中世以来の信と知の対立の歴史を見据えたものだった。実は「ニイチェのツァラツストラとマイスター・エックハルト」という論文も，そうした西洋思想史の壮大な構図に中で書かれていたのである。もはや詳しく述べる余裕はないが，「宗教的生と實證的精神」という標題を付けられたその論文第三節では，例えば「ヘーゲル歿後の思想界とトーマス歿後のそれとの間には顯著な類似があると思ふのであるが，併し特に注意したいのは，その兩方の間にいはば世界思想史的な聯關が潜んではゐないかといふことである。トーマスに於いて一度調停された信と知とは，中世より近世への轉換期に全く分裂した。一方に於ける宗教改革，他方に於ける人文主義と自然科學の勃興及びベーコンの論理學，がそれを表示している」（第一巻，p. 29－p. 30）といった一節が見られ，このような観点のもとに近代思想史の見取り図の中でニーチェ思想が捉えられていたのである。

西谷の議論が，このように該博な西洋思想史の知見に基づいているということにあらためて瞠目せざるを得ないが，ともあれここでは，以上ニーチェのニヒリズム論で提示されていたニヒリズムを通してのニヒリズムの超克という課題が，注4）で見たように西谷の思索の課題であり続けたということをもう一度確認しておきたい。また，西谷の議論には日本人にとってのニヒリズム問題の意味といった面も含まれているが，こうした積み残した論点については別の機会に論じてみたいと思う。

注

1) 代表的なものとしては次のようなものがある．西尾幹二『ニーチェ第一部』，中央公論社，1977年，p. 3−p. 107．高松敏男・西尾幹二編『ニーチェ全集（別巻）日本人のニーチェ研究譜』，白水社，1982年，p. 509−p. 536．山崎庸佑『人類の知的遺産54ニーチェ』，講談社，1978年，p. 83−p. 118．高松敏男『ニーチェから日本近代文学へ』，幻想社，1981年，p. 5−p. 84．K. Oishi, "Nietzsche als Philologe in Japan. Versuch einer Rekonstruktion der Rezeptiongeschichte", Herausgegeben von Behler, Montinari, Muller-Lauter, Benzel, *Nietzsche-Studien*, Bd. 17, 1988, s. 315−s. 335

2) 和辻と三木の代表的なニーチェ論としては，それぞれ和辻哲郎『ニイチェ研究』（大正2年）と三木清「ニイチェと現代思想」（昭和10年）があるが，両者については筆者は別の機会に論じたことがある．拙論「ニーチェと三木清」，比較思想学会編『比較思想研究』第19号，1993年，p. 29−p. 38．拙論「和辻哲郎と生の哲学」，比較思想学会編『比較思想研究』第29号，2003年，p. 62−p. 69．また，日本におけるニーチェ受容史を問題とする際には，あらためて言うまでもなく，ここまで言及してきた哲学者に加えて明治期の哲学者や，明治以来の文学者におけるニーチェ受容も主題化されねばならない．が，明治期における哲学，思想分野からのニーチェの紹介や解釈にはニーチェの思想に関する無理解や誤解も多く，それらに関しては本稿とは別の観点，別の問題関心からのアプローチが必要だと思われる．また，文学者におけるニーチェ受容に関して言えば，研究対象として高山樗牛を中心とした美的生活論争，またニーチェに関して多くを語らなかったとはいえ，例えば森鴎外や小林秀雄，さらにはエッセイやアフォリズムの詩においてニーチェとの顕著な関係を示している萩原朔太郎などが取り上げられねばならないと思われるが，それら文学者のニーチェ受容の解明も本稿とは別の課題に属す事柄である．ニーチェ受容史に関わる以上一連の諸問題については，別の機会に論じたいと考えている．さて，以上日本におけるニーチェ受容史の研究に関する簡略な見通しである。本稿は，こうした見通しを前提としてニーチェ受容史において従来検討が手薄であった局面を検討する試みの一つであるが，以上から，第二次世界大戦後のニーチェ理解という歴史的には比較的新しい時期の対象を扱いながら，本稿の標題で「日本におけるニーチェ受容史瞥見（1)」とした経緯はご理解いただけたかと思う．

3) 京都学派をどのように同定するかという問題に関しては，以下の簡便な整理を参考にした．ジョン・C・マラルド（安積百合香訳）「欧米における研究の視点からみた京都学派のアイデンティティとそれをめぐる諸問題」，藤田正勝編『京都学派の哲学』，昭和堂，2001年，p. 310−p. 332.

4) この点に関しては西谷自身も認めており，自らの哲学的営為を回顧する一文において西谷は次のように言っている．「哲學以前と哲學とを通じて私にとっての根本的な課題は，簡單に言へば，ニヒリズムを通してのニヒリズムの超克といふことであった．ニヒリズムに留まり得ない以上，その超克といふことは當然の要求であったが，同時にそのためには，どこまでもニヒリズムを通してその底をくぐるといふ以外に路はなかった．さふいふことは，ニヒリズムの本質そのものに含まれてゐるのである．」西谷啓治『西谷啓治著作集　第二十巻』，創文社，1986年，p. 192．なお，これ以降，西谷の著作集からの引用，参照箇所の指示は，本文中で巻数とページ数のみ記すことにする．

5) 西谷は昭和12年から昭和14年にかけてドイツ留学をしているが，この留学以来ハイデガーと西谷とのあいだには直接的な交流がある由である．ハイデガーは，1936年以降ニーチェに関する講義を断続的に行っており，西谷の留学期間は，ハイデガーによるニーチェとの対決が行われていた時期に当たる．この点を考えれば，ハイデガーとの交流から西谷の思考が触発された面が多少なりともあったか

と推測されるが，この点については直接的な資料を持ちあわせていないので推測にとどめる．また，ニーチェに関するハイデガーの主著は以下の通りである．M. Heidegger, *Nietzsche*, Bd. 1 Bd. 2, Neske, 1961（Zwite Auflage）

6) F. Nietzsche, *Der Wille Zur Macht*, Vorrede 3（番号はアフォリズム番号）．ニーチェの遺稿を妹らが編纂してできあがったこの書物が，編集の仕方等において問題のある書物であることは，現在では周知の通りである．ただ，西谷はニーチェの遺稿をこの書物で読んでいたと思われるので，本稿ではこの書物で引用箇所を記すことにする．また西谷の著作でこの部分が引用されているのは，第八巻，p. 47においてである．

7) F. Nietzsche, *Der Wille Zur Macht*, 2（番号はアフォリズム番号）

8) ニーチェのニヒリズム論のこのような論点については，筆者は別の機会にそれぞれ異なった視角からではあるが論じたことがある．拙論「真理の自己止揚と解釈への定位」，東京大学文学部倫理学研究室編『倫理学紀要』第3輯，1986年，p. 40－p. 59．拙論「信と知の変容」，日本倫理学会編『日本倫理学会論集28　信と知』，1993年，p. 81－p. 101．拙論「ニーチェと価値相対主義の問題」，竹内整一・古東哲明編『ニヒリズムからの出発』，ナカニシヤ出版，2001年，p. 47－p. 65

9) ハイデガーのニーチェ解釈との違いを含めて，この点については西谷自身も意識していたことだと思われる．第八巻，p. 188参照．

引用文献・参考文献（西谷の著作集以外は，注で触れたものは除く）

西谷啓治『西谷啓治著作集　第一巻』，創文社，1986年
西谷啓治『西谷啓治著作集　第八巻』，創文社，1986年
西谷啓治『西谷啓治著作集　第二十巻』，創文社，1990年
上田閑照編『宗教と非宗教の間』，岩波書店，1996年
上田閑照編『情意における空――西谷啓治先生追悼』，創文社，1992年
京都宗教哲学会編『渓聲西谷啓治＜下＞思想篇』，一燈園燈影舎，1993年
高坂正顕『高坂正顕著作集　第五巻』，理想社，1964年
河上徹太郎，竹内好他『近代の超克』，冨山房，1979年